

Title	戸部健君博士学位請求論文審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2008
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.77, No.1 (2008. 7) ,p.153- 157
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20080700-0153">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20080700-0153</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 彙報

## 戸部健君博士学位請求論文審査要旨

### 近代天津における「社会教育」の変容過程

#### 論文の要旨

（）でいう「社会教育」とは、正規の学校教育を卒業した成人や学校に通えない、または通わない児童、そして彼らが暮らす社会を対象とした教育事業のことで、具体的には図書館、新聞閲覧所、貧民学校、通俗講演などの運営および社会改良運動の挙行、さらに「不良」映画や演劇・小説に対する検問などの諸活動が挙げられ、日本のいわゆる社会教育とは性質を異なるものである。本研究は天津という開港都市での例に基づき、

近代中国における「社会教育」の形成と変容の過程を地域の視点から長期的に検討したものである。

まず全体の構成を示すため、詳細な目次を以下に掲げる。

#### 序章　近代中国「社会教育」史研究の現状と課題 はじめに

##### 1 問題の所在

- （1）中国の近代
- （2）中国教育の近代

- （3）「社会教育」研究の必要性

- 2 近代中国「社会教育」史の現状と課題

#### 彙報

- （4）近代中国「社会教育」史研究の現状
- （5）「社会教育」史研究の課題と本稿の位置
- 3 本稿の構成

#### 第一章 「社会教育」の導入—清末天津の教育事情

##### はじめに

##### 1 天津の教学状況について

- （1）天津の歴史的背景
- （2）教育の普及度

##### 2 清末天津における「社会教育」の導入

- （1）清末天津の「社会教育」と林兆翰
- （2）「社会教育」の内容

##### おわりに

#### 第二章 清末における「社会教育」と地域社会—「衛生」の教育を例として—

##### はじめに

##### 1 「社会教育」家丁国瑞について

##### 2 丁国瑞による「衛生」の教育

- （1）清末における「衛生」をめぐる議論
- （2）丁国瑞の考える「衛生」
- （3）丁国瑞による「衛生」の教育

##### 3 天津医薬研究会による「衛生」の研究とその教育

- （1）研究活動

(2) 教育活動

4 天津医薬研究会を支持する人々

(1) 支持者の背景

(2) 支持する理由

(3) 研究会に対する援助のあり様

おわりに

第三章 「社会教育」の組織化

—中華民国北京政府期における通俗教育会—

はじめに

1 通俗教育界の成立

2 北京政府期天津における「社会教育」の展開

(1) 天津における通俗教育会—社会教育辦事處の成立—

(2) 民衆教育

(3) 社会事業

3 天津「社会教育」の「伝統」的性格

おわりに

第四章 社会教育の拡大化

—南京国民政府の成立と天津「社会教育」の変容—

はじめに

1 教育局の成立と天津「社会教育」の変容

(1) 天津市教育局の成立

(2) 教育局による「社会教育」概観

補論 「社会教育」の教育内容

—中華民国期天津における「衛生」の教育を例に—

はじめに

1 史料について

2 広智館グループの動向

(1) 社会教育辦事處から広智館グループへ

(2) 広智館グループの活動

(3) 広智館グループと天津教育局との関係

おわりに

第五章 「社会教育」の緻密化

—民衆教育館による「社会教育」の変容—

はじめに

1 民衆教育館について

(1) 民衆教育館成立の背景

(2) 民衆教育館の役割

2 「社会教育」中心機関への道程

—国民政府期天津の民衆教育館

3 「社会教育」の緻密化—日中戦争期天津の新民教育館

(1) 「社会教育」区の設置と民衆教育館の増加

(2) 「社会教育」活動の緻密化

(3) 民衆との関係

おわりに

## 2 病気の予防

(1) いかにして病気を予防するか？

(2) なぜ病気を予防できるのか？

## 3 病気の治療法

(1) いかにして病気を治療するか？

(2) 「不治の病」をいかにして治すか？

おわりに

## 終章 近代天津における「社会教育」の変容過程

### 1 本稿の成果

### 2 今後の課題

はじめに各章で展開されている論点の概要を述べる。

序章では、近代中国における教育の中で「社会教育」が果たした役割の大きさについて述べ、その研究が未開拓であることの現状とその研究・解明の必要を説く。

第一章では、二〇世紀極初の天津で「社会教育」が導入された状況とその内容について論ずる。ここでは、義和團事件以後、富国強兵をめざす清朝は近代教育を本格的に導入したが、なお学校に通わない、または通えない児童が依然として多かつたこと、このような未就学児童および近代的な学校に通つた経験のない成人（失学民衆）に対し、社会にはびこる悪習の除去や啓蒙を目的に実施された教育が「社会教育」であったこと、天津においては全国的に見ても早い時期から博物館、宣講所、閱報所などが「社会教育」を導入していたこと、などを具体的に明

らかにする。

第二章では、「社会教育」の内容が「近代的」なものであつた反面、伝統的・教化的なものを多く含んでいたことを指摘する。例えば漢方医でありながら天津を代表する「社会教育」家であつた丁国瑞が「社会教育」の現場において行つた衛生教育では、伝統医学の理論で解釈した「衛生」を普及させることで伝統医学そのものの地位向上をもはからうとした事実を挙げる。このように清末天津における「社会教育」は民衆の改良を目指す革新性に満ちた活動であるとともに、従来の利益団体や技術者がみずから利権や技術を正当化させ、彼らの希望に合致した民衆を作り出すための道具ともなりえたことを明らかにする。また、この時点においては中央・地方各政府からの締め付けはさほど強くなく、結果として地方人士による「社会教育」への参入を容易にしていたことをあわせて指摘する。

第三章では、一九一二一九二七年の間、北京政府によつて積極的に理解が示されたことから「社会教育」が組織化されに至つた過程を丁寧に追つている。従来個別に活動していた各事業は政府の手で統合され始めた。中央には全国の「社会教育」を統轄する社会教育司ができ、地方には各地の「社会教育」を管理する通俗教育会が設立された。ただし、この時期の「社会教育」は中央政府に主導権がなく、地方政府および地方人士の努力に頼つており、その意味では地方人士たちの「社会教育」への参入はなお容易であった。天津の通俗教育会である天津社会教育辦事處では民衆の社会道德を向上させるために儒

教道德を重視したことから、社会の進歩が目的であるはずの「社会教育」でかえつて伝統的な価値観が復活するようになつた。こうした儒教道德の保持は新文化運動からは批判されたが、社会教育辦事処にとつてはこれこそが社会を進歩させるものであつた。そして社会教育辦事処の考えに同調した者たちの援助によつて事業規模を拡大させていった、などの諸点に言及する。

第四章では、南京国民政府による北伐完成後の天津の「社会教育」の大きな変化について明らかにする。この時期に新たに誕生した天津教育局は社会教育辦事処を接收してその事業を引き継ぎ、多額の資金を投入してインフラ整備に努めた結果、その規模はかつてないほどまでに拡大することになつたといふ。また、「社会教育」に対する国民政府の関与が強まつたため、それは国民政府への忠誠心を涵養する宣伝機関としての性格をも具備するようになつた点を指摘する。

第五章では、その後の南京国民政府によって整備され、地域の「社会教育」を企画・運営する中心機関としての役割が与えられた民衆教育館とその「社会教育」の緻密化の過程を追う。天津では一九三六年頃から社会教育区という管轄区域が設けられ、各区に民衆教育館が設けられたことから、地域の特性に応じたきめ細かな活動が可能になつたといふ。

補論では、具体的な教育内容としての「衛生」の教育を取り上げ、病気の予防法や治療法において西洋医学の合理性とともに中國の伝統医学や民間医療のロジックが導入された点を再度明らかにすることで自論を補強する。

最後に終章では、以上の考察の結果、近代天津における「社会教育」が、導入（清末）→組織化（北京政府期）→拡大化（南京国民政府期）→緻密化（日中戦争期）という過程をたどつて変容していく軌跡を明らかにして本研究を締めくくる。

#### 審査要旨

まず本研究について高く評価できることは次の諸点に集約される。

第一は、本研究の斬新さである。近代中国の「社会教育」の研究はこれまで極めて少なく、とりわけ各時代の政府機関が行政として実施した「社会教育」に着目し、その具体的かつ長期的な活動をたどつたものは皆無に等しい。本研究は天津という一つの地域に即してその歴史的展開を初めて明らかにしたものであり、近代中国の「社会教育」についての一定の見通しを与えた功績は大きい。

第二は、近代中国の「社会教育」史を時代区分する上での新たな方法を提示していることである。近代中国の「社会教育」史の時代区分においては従来その時々の担当政権や教育の性格の相違を基準にしてきたが、本研究ではそのような分類にあえて立ち入らず、それらを包括する教育の“規模”や“精度”といった新たな視点を導入したことに意味がある。その結果、中国の「社会教育」の展開には導入→組織化→拡大化→緻密化という流れが存在するとして導き出した結論は、論理的にも実証的にもより説得力を持つものになり、従来の時代区分の弱点を

補完する役割を果たすようになった。

第三は、本研究が明らかにした新事実である。民国前期の「社会教育」において儒教的な要素が多く含まれていたことや衛生教育においても漢方医の役割が活発だったことは従来の中近史研究では見落とされていた点であり、結果的に近代中國の歴史における伝統的なものの影響を再認識させるに至った。

近代教育史の研究においては「遅れたもの」としてとかく捨象されがちであった伝統的な要素に光を当て、そうした要素をも包括的に取り込むことで新たな近代教育史を構築したといえる。

第四は、本研究に対する著者の姿勢である。本研究が天津をベースとし、中国の図書館・文書館などの広範な資料収集と丁寧で網羅的な研究史の整理・吸収という作業の上に、平明な文章によつて天津社会教育史を著したものであることは衆目の一致するところである。論理の飛躍や理解困難な展開はほとんど見られず、安定かつ堅実な議論が展開されている点は著者の人柄を如実に示している。

もちろん本研究にも若干の問題点がないわけではない。一つ

として、本研究が「社会教育」の展開の過程を初めて明らかにした点は評価できるが、天津以外の地域との近似性・相異性の指摘は今後の課題として残されている。また、国民政府や日本の占領時期におけるその「連續性」を評価することは歴史観に関わる問題として慎重さが求められる。二つとして、こうした問題を論じるにあたつてはぜひとも一九四九年以降の展開を視野に入れなければならないが、この位置づけもまた今後の課題

として挙げるに止まつてゐる。この時期のあり方を明らかにして初めて中国における「社会教育」の全貌が解明できるのではないか。三つとして、「社会教育」の伝統的な側面を指摘したのは本研究の大きな貢献と評価できるが、その「伝統」とは何か、すなわち「近代性」との関わりにおいてそれはどのように評価しうるものなのかを明らかにする必要がある。四つとして、民衆の「社会教育」の受容の実態を問わねばならない。教育史が教育制度史の域を超えるためには、それを受け止める側のあり方の解明が不可欠である。もつとも、これらの四つの問題点については著者自身がすでに自覚しており、近い将来において必ずや克服されることが期待できよう。

以上が本研究の審査報告である。本研究は著者の弛まぬ努力と瑞々しい感性によつて生まれた中国近代史研究の貴重な成果であり、間違いなくこれからの中近史研究の発展に新たな可能性を拓くものである。それゆえ審査を担当した委員三名は全員一致して、本研究が博士（史学）の学位を得るに十分値するものと判断する次第である。

#### 論文審査担当者

主査	慶應義塾大学文学部教授・同大学院文学研
究科委員	博士（文学）
副査	青山学院大学文学部教授 博士（文学） 飯島 涉
副査	東京大学大学院人文社会系研究科准教授 博士（文学） 吉澤誠一郎